

メモ「宗教心とは」

作者：エリー

制作日：2020/03/08

どんなことにも最初がある。生み出した人がいる。
教わらなくても生きていだけで気づいて成長していく特別な人がいる。天才という。
彼らは物語の主人公として偉業を語り継がれた。

昔の庶民には、「天才は特別であり、わたしたちにはできない」という共通認識があった。
今は「誰にでも何かしらの才能がある」と教えられる。

自分で生み出すことはできないが、生み出されたものを教えられて理解できる秀才がいる。
秀才は才能を認められて選ばれた特別な存在であり、少数のエリート。

そこに公共教育というものが導入された。
誰にでも分かるように噛み砕いて丁寧に教えることで全員が秀才になるはずだった。
しかし、ならなかった。
そこで今度は天才を生み出そうとした。
しかし、それもうまくいかなかった。

天才は教える人がいなくても生まれる。
秀才は教える人がいないと生まれない。
しかし、教えたら全員できるようになるわけではない。
なぜか？

普通、物事を教えるのに全体を一言に要約して「ゴール」を伝える。
そこから大分類をまず教えて、さらに細かいところを教えていく。

「要約と概要」は、形而上の類。
共通項から必要最低限を選び抜いて整理した「理論上」の答え。
「現実」は、理論通りにはいかない。
そこで形而上の理論と、形而下の現実を「つなげる」ための「経験」が問われてくる。

経験とはどんな感じか？

教えられたことを「そうなるはず」と論理上の正解を答えてうまくいかない。

失敗が起きる。

「なぜ失敗したか？」を考え続けて、いろいろ試して、「そういうことではないか？」と気づいたとき、理論が身について血肉となる。

では血肉となっていない、理論上は正しいが、状況を反映していない、いわゆる「正論」を主張して批判するだけなら？

それは教育の弊害だ。

厄介なのは習った全体の要約と概要は正しいのだ。間違いではない。

正しいことを言っている。

しかし理解が浅く、状況を反映していない。使えない意見だ。

理想通りにいかないならどうするか？

ベストが無理ならベターを狙うにはどうするか？

そこを考えてない意見は無価値だ。

教えられた正しいことを言っているのに相手が理解しない場合、相手をバカだと思う。

しかし、実際には状況を反映して細部まで判断できない方がバカなのだ。

厄介なのは、5ミリの解像度で物事を見ている目に、1ミリの解像度でしか分からない差異は理解できないのだ。

1ミリの違いを「ここがポイントになって、違いが生まれる」といくら説明されても、その「違い」が見えないから分からない。

見える人には見えているから、見えない状態が分からない。

「ココがだめでしょ！」と指摘したら分かると思う。

しかし、識別できない側は、言われたところを言われた通りに直せても、次もまた同じ過ちを繰り返す。なぜなら、区別がつかないから。

それが「分からない」の正体であり、努力ではどうにもならない部分がある。

分からない人は繊細ではないから、細かいことを気にせず、大きなくくりでじっくり見ている。細部ばかりに目がいて全体が見えなくなっている時には、バカの一言で目を覚ます可能性はある。

しかし、基本的に識別できない人が識別できるようになることは難しい。役立つ一言を言えても、実際に対処できるのは識別能力がある人なのだ。

世界を何万色ものフルカラーで見ている人もいれば、白黒の2色で見ている人もいる。

2色で見ている人は、あるか、ないか、はっきりする。

フルカラーの人は、どのようにあるのかをとらえることができる。

2色の絵に色付けすることもできれば、フルカラーを2色に落とすこともできる。

自由に解像度を変えられる人もいる。

しかし、多くは固定となる。少ない数からだんだん把握できる数が多くなる。

天才は観察から全体を要約する一言と、内容を分類する識別力を持っている。

理解した時、全体を一言で把握して、経験から詳細の対応を身に着けている。

骨格と血肉を併せ持つ、生き生きとした知識となる。

秀才には全体の要約「これは何をどうする話です」や概要「そのためにはAとBとCが必要です」は教える。

けれども覚えたことを現実にかすために、失敗から「形而上と形而下」をつなげる方法を体得していくことは、自分がしないと意味がない。

指示されて言われるままに動いていても、「自分ならどうする？」と考えているなら、やがて判断がつくようになるだろう。

しかし、言われたことを意味も考えずになんとかやるだけでなら、いつまでたっても上達しないだろう。

「形而上と形而下のつながりを体得していくこと」がないまま「要約と概要だけ知っている状態」はとても危険だ。

原理原則を貫いて差異を無視した正論のおしつけをすることに知識を使えば、問題は解決しない

から。

目の前の複雑な出来事を要素に分解すると何に分類されてどんな分野に当てはまるのか？
理論と現象をつなげて、筋の通った解決案を導き出すことがゴールとなる。

全体を要約して一言にする。

内容を分類して教える順番を考える。

この二つは他人にやってもらうことができる。

「教える内容」となる。

しかし、理論から現象に対応する「解決案」を出すことこそが、「考えること」であり、「教えることができない部分」。

実践することで身に着くから、「機会」が重要な要素となる。

では、機会に恵まれて、自分が実行する立場に立った時、どうするか？

「こんなやり方があるよ」と「似たケース」を聞くことはできる。

しかし、「今、この時」に対応するのは、本人がやるしかない。

決断して、当事者として対処していく。

「状況」と「実行者の能力」から「実行可能な解決案」を出すことを、「主体的に行動する」「自己実現」という場合、何が起きるのか？

「やり方を教えられても、これまでとの違いを吸収して、今回どうするか？」を「考えて、決断して、実行する」ができない人が出てくる。

「教えられてもできない」が起きる。

タロット占いの場合、カードを展開するまでの手順は分かる。

該当するページの説明を読んだ後、「自分の質問のケースでは何を意味しているのか？」を選択することになる。

ここでなんとなくカード同士のつながりから意味を推論できるかどうかが鍵なのだ。

質問者の説明とカードが持っている意味から、「言わんとすること」を探り当てていく。
それができる人とできない人がいる。
ここは分からないというだけ親切。
ワンパターンのフレーズをあてはめ押し付けるのは最悪。

たとえば占星術なら、「あなたは双子座だからおしゃべりが好きだ」的な決めつけは、知識があるから起きる弊害だ。

最初の話に戻るが、かつて「主体的に行動する人」は特別な存在であり、多くの人は主体になれないと考えられていた。

どうしていたか？
伝統を守っていた。
あるいは結果を出して「この人はできる」と認められた人に頼った。

頼る場合、「何をどうしたい」と願望を語り、やり方を考えてもらった。
「その願いは今のあなたには無理だから、まずは〇〇から始めなさい」的な長期指導になることもあった。
それは可能性があると思った場合で、可能性がないと思えば相手にされない。
つまり、言って分かる人にしか語られないから、分からないと思われたら誰からも何も言われないのだ。

要約と概要を知ることは簡単だ。
ググればすぐわかる。
だが、「自分の状況と参加者の能力に合わせてカスタマイズする」ができない場合、問題は解決しない。

たとえば、スポンジケーキを焼いて準備して、「クリームを塗って、イチゴを飾る」だけするなら子どもでもできる。

しかし、オーブンや材料を用意して、スポンジを焼き、「段取りすること」は誰でもできるわけじゃない。

クリームを塗ったケーキに「イチゴを飾る」をしてほめられる。
すると今度はクリームも塗りたくなる。
さらにスポンジも焼きたくなる。
最終的には段取りする側になることがゴールだ。

もっと言えば、オーブンを作ったり、電気を作って配ったり、「インフラ整備」のような大掛かりな事業を行う人が出てきてほしい。

教育で全員そうなるはずだったのだ。
しかし、かなりの数、挫折してしまう。

ケーキにイチゴをのせるだけの仕事は安いから、機械に変わられる。
段取りできる「手配力」がなければ高収入は望めない。

勉強すれば誰でもできるようになる。
それは嘘だ。
やった人の一部しか身につかない。
やらない人が最初に脱落する。
やったけど結果が出ない人が次に脱落する。

好きだが向いてなかっただけで、ほかのことならできるかもしれない。
誰ができて、誰ができないのか、分からない。

「従え」とおさえつけて自由がない昔も辛い。
しかし、「自由だ」と解放されて「従うものがない」今も辛い。

やってみなければ答えは分からない。

しかし繰り返して時間をかけられることは限られている。

ならば「やってほしいことをする人」を加護し、「好きなことをする人」は結果責任を問うものとする。

もし好きなことで結果が出せなくても、必要なことができるなら帰る場所がある。

では、必要なこともできないとなったら？

社会から排除せず、フォローするために何が必要なのか？

福祉というのは、「あなたは弱いから助けます」という弱者烙印を押し。

宗教なら、「あなたの魂は生まれたばかりで若いから」と格差は当然のものと肯定する。

あるいは、「あなたは難しい部分を任されたから苦労している」と労う。

「教えられれば誰でもできるようになる」という「平等」「対等」を前提とする場合、宗教は出てこない。

しかし、「今生で何もなせないまま死ぬかもしれない」と「生きてきた意味」を問うとき、「なぜ生まれてきたのか？」という問いが生まれる。

その問いこそが宗教なのだ。

宗教団体が宗教なわけではない。

「問いを持つこと」が宗教の始まりなのだ。

「なぜ自分はできるようにならないのか？」という問いに対して、「答えなどない＝生きることに意味はない」となると無宗教だ。

「魂が若いから」

「難しい部分を引き受けたから」

など「神の一部を魂として受け取り、育てて返す」という共通認識が生まれる時、宗教団体となる。

成功者は、「できない」を本当の意味で体験してない。

わたしは、何度やっても論理的に話せない。

そして、勉強したことの結果が出てない。

ダメでもあきらめずに続けているが、嫌になることもある。

話には、「型」や「骨格」と呼ばれるものがある。

何について、どんな立場で、意見を言います。

このメモなら「宗教は問いから始まるを肯定する立場で意見を言います」となる。

キーワードは、「教育でみんながわかるようになるのか？」で「ノー」の立場で書いている。

ここに書いたことは、物語を書くことや、論理的になろうとしたことや、タロットや占星術で人を占ったり、カバラなどからヒントを得たこと。

「ダメだ」となったとき、何もなければあきらめてしまう。

「ダメでもダメでもあきらめない」はある意味才能なのだ。

「ダメだった」と失敗するのはましな方。

「ダメかもしれない」とやらない場合は何の変化も起きない。

行き詰ってどうにもならない悪い状態にある時、「できないまま死ぬかもしれない」という厳しい現実を前にする。

「あきらめない理由」として「神の体の一部である魂を預かり育てるため」という共通認識がある時、「やるべきことを定めて求めつつ、できてない現実をフォローする」ができる。

だから伝統として考え方が生き残っているのだろう。

チャンスを平等にしたら誰でもいい結果が出せるはず。

チャンスはあったのに結果が出せなかった。

あれも、これも、それも同じ。

どうやっても結果を出せない。

ならば従う側になる？

「できないものはいらない」と拒まれる中で、「できないから支援してほしい」と頼んでも「甘えている」と拒否される。

伝統を守り、従うだけなら、弱いものから死んでいく厳しい暮らしのままだった。

チャレンジは大事だ。

だからチャレンジできるように解放したのだ。

だが、弱いものを殺さず、全員生かすなら、与えられたもので生きていくしかない人が出る。

寄生する生き方しかできない人が出てくる。

実際、わたしは親と国の支援で暮らしている。

働いてないから、起きていられるときに、好きなことをして、こうして少しずつメモを集めてお話を書いている。

統合失調症や便失禁や尿失禁や頭痛や肩こりで困ることはあっても、好きなことができているから不幸だとは思わない。

「お話の構成がでたらめだ」と言われて、論理的に話すためにはどうしたらいいか調べた。

論理国語という小学生向けの教科書で、「抽象レベルを合わせて話す」を知る。

たとえば、「この話は友情の話です」は抽象レベルが高く、いろんな状況が当てはまる。

そこで、「AさんがBさんと少しずつ親しくなっていくほのぼのとした話です」と具体化したなら？

抽象的に一言で要約している「友情の話」は、何のことか分かる。

しかし具体的に文章で言っている「AさんとBさんが少しずつ親しくなっていくほのぼのとした話です」は友情と分かる人と分からない人がいる。

行動から要約した一言を出せる人と出せない人がいるのだ。

ちなみにわたしは要約が出せない人だった。だから人に「今日ね、何があつてね」と語って、

「それは〇〇だね」と要約されると納得するタイプだった。

わたしは、人を好きになると「〇〇さんが好き」と思うと思っていた。

「好き」という行為があると思っていた。

ところが、好きは抽象単語で、好きだからすることは多様だ。

たとえば、「ずっと目で追ってしまう」「なにしてるか考える」などすべてを総称して好きというのだ。

「抽象的な好きという単語」と「具体的なずっと目で追ってしまうという行為」がつながっている人は、最初に全体を一言で抽象的に語り、そこから関連する具体的な行為を選んで話することができる。

主題を定めて、関係を語り、細部を具体的に説明する場合、筋の通ったまとまった話になる。

それが分かってから、話の書き方を変えた。

昔は、「どんな人物が、どういう状況にあるか？」という冒頭を考えて、そこから未来に向かって展開させていった。

すると脈絡がない話になるか、最悪完成しない。

そうではなく、「まず軽く冒頭を考える」「展開をラストまで考える」「ラストから逆算してなぜそうなったか？」を考えて冒頭を考え直す。

なにが違うのか？

冒頭からラストに向かってああなって、こうなってと考えていく。

書きあがったとき、ここは最初に説明した方がいいなと思う。

すると1、2行情報を差し込む程度の伏線を張る。

読み手にとって、印象が薄いから伏線だと気づかない。

そもそも全体を統一する「誰が何する話」という一言が曖昧で弱いのだ。

ラストから「なぜそうなったか？」を考えて理由をエピソード化していく場合、伏線が情報で

はなくエピソード丸ごとになる。

また何度も繰り返し出てくるから、印象が深くなる。

たとえば、「めんどくさがり」が、めんどうだからとルーズにし続ける。

小さいことだから、すぐには問題が起こらない。

けれども、つもりにつもった問題が一気に襲い掛かる。

動かざる得ない状況が出来上がる。

「どう変わるか？」は考えどころとなる。

最終的にちゃんとやるようになる。

感情は抽象的だ。

行動は具体的だ。

目に見える行為から、目に見えない感情まで推測することができるか？

たとえば、あからさまに怒りの表情を浮かべているなら「怒ってる？」と気づく。

しかし、何に対して、どんな風に怒っているのかまでは分からない。

自分が何かしたのか、その人に何かあったのか、分からない。

ニコニコしているのを自分への好意ととるか、よいことがあったととるか。

行動から感情を想像することは難しい。

物語では、感情から行動を考えて、行為を生み出す。

よくある「怒っているから物を投げる」は、映像表現としては派手で分かりやすい。

しかし、現実にそんなことする人いたら、ダメな人だ。

実際、洋菓子店のバイト先で、イライラしてプチケーキを投げ落とした雇い主がいた。

わたしはそのままにして洗い物していた。

すると誰も片付ける人がいないから、落とした本人が片付けるしかない。

映像ではカットされてしまうが、投げつけたものは勝手に片付かない。

誰かが片付けなければならないのだ。

映像表現では分かりやすい感情表現が取られる。

しかし、現実には節度が求められるから、怒っていても怒りを丸出しにする人はいない。
何事もなかったように平坦に対応される。
するとさらに何を考えているか分からなくなる。

ある人が、ある行為をするとき、どんな感情を持っているのか。
個人の場合、行為と感情の結びつきは千差万別だ。

たとえば、「○○だから嫌い」という話にめちやくちや盛り上がる人もいる。
しかし、嫌いな話を聞いていると嫌な気持ちになるので嫌だという人もいる。
つまり、「楽しいこと」という抽象単語に結びつく行為が、「悪口を言うこと」も「好きなものを食べること」も含まれて複雑なのだ。

わたしは、なぜ複雑な現実を切り捨てて単純化して統一するのか謎だった。
ところが、カバラの生命の木で、上から下におろすものだと知る。
「楽しい」という抽象単語があって、そこに付属する様々な行為が生まれる。

つまり、「楽しいこと」という大分類があって、その下に「他人のあら捜しなど否定が楽しい」と「おいしいものを食べるなど肯定が楽しい」など分岐がある。
分岐がいくつあって、どんな状況に合致するのか？
それを感覚的にさっと答えられるタイプがいる。
それは勉強とは別の才能となる。

でも上と下をつなげて、全体の中の位置や関係を把握することは同じなのだ。

たとえば、「神の体の一部を魂として受け取り育てて返す世界」があったとする。
そこでは、「魂を育てるとは何か？」が問われる。
生きること自体が魂を育てることであり、生きていけるように生活することが修行となる。
そう考えた場合、家事も仕事もすべては修行だ。
しかし、勉強はそれ自体では修行ではない。
勉強したことを生かして初めて修行となる。
ならば、実践するチャンスがいるよね？

「お客さんになること」は、他人の魂を育てる道なのだ。
だから、自分ができるようになったことを指導しつつ任せることは、他人を育てる方法となる。
それがお手伝い文化となる。

「あなたの世話を受け入れます」という形で子どもを育てるのだ。

「子どもの世話をし勉強に集中できる環境を作る」とは真逆の方向性だ。

世界観が変われば、位置や関係は変わる。

2173年シリーズはグリーン教まで行って行き詰ってしまった。

それは、冒頭を考えて未来の展開を書こうとしたから。

ファンタジー設定資料を読んで「教国かっこいい」という単純な理由からグリーン教を考えたが、確かに宗教が鍵なのだ。

「悪魔狩りサザンカ」は、今までのまとめとなる話。

予定では、ネーム原作になる。

文章で情景描写をする才能がないなら、絵で説明すればよいのでは？

それを漫画という！

というやり取りで決まった。

考えたことをまとめたメモでした。